

秀長暗殺

早川隆 Takashi Hayakawa



アルファポリス文庫

<https://www.alfabopolis.co.jp/>

登場人物

豊臣秀長(小一郎)

関白の弟
大和大納言

居相孫作

高虎の臣、馬の口取

千利休

茶人

藤堂高虎(与右衛門)

秀長の重臣

徳川家康

東国の覇者

古溪宗陳

大徳寺住持

豊臣秀吉

高みに座す男。関白

小堀正次

秀長の重臣

石田三成(佐吉)

奉行衆

お藤の方

秀長の側室

施薬院全宗

関白秀吉の侍医

藤堂新七郎

高虎の臣

小堀作助

正次の子。のちの遠州

第一章

大和郡山城外 葬送場

天正十九年閏一月二日 午後

天正十九年一月二十二日(千五百九十一年二月十五日)、大和大納言こと豊臣小一郎秀長が、五十二歳の生涯を閉じた。

晩年は病に苦しみ、本拠地の大和郡山城内に逼塞する日が多かったが、そうなる前は兄・豊臣秀吉をよく補佐し、幾つもの大戦に勝利して豊臣家の全国制覇を助けた。天下一統後も海千山千の武家の棟梁たちや万民を心服させ、天下の政を安定させる上で多大な功績を残した。

早すぎるその死によつて悲しみは朝野に満ち、特に領地の大和、紀伊、和泉三国では数多の嘆きの声が飢した。古くから巨大な寺社勢力や各地に割拠する土豪たちの理不尽で気まぐれな搾取に苦しめられ続けてきたこれら諸国では、秀長治世の数年間で行われた大々的な検地と、それに伴う公明正大な税の収受到感謝する者が多かった。

数日後、郡山城内から鎖龕さがんされた棺が運び出され、近在しんじょうに設えられた葬送場へとゆくり送られた。遺体は棺ごと荼毘たびに付され、そのまわりを大勢の僧侶そうりよが取り囲んで読経を続けた。兄の秀吉はもとより一門衆、高位の貴族や僧侶たち、多数の武士たちなどが入れ替わり立ち替わり姿を見せた。近くに寄れるわけもないのに、三国のあちこちから名もなき民草たみくさどもが現れ、辻々つじつじでそつと手を合わせて、偉大な大納言への無言の感謝を伝えた。

真冬だというのに、天候はうららかで、陽光が心地よかった。

大きな火屋ほやが建てられ、掘り下げられた火床ひどこにまだ薪木しんぎのかけらがいくつか転がっていたが、既に秀長の遺骨や棺などは取り片付けられている。数名の隠亡おんまつたちが無言で清掃にあたる以外、その場にはもう誰もいなかったが、ただ一人、秀長股肱こたうの重臣であった藤堂与右衛門高虎とうどうよゑもんたかたからという男だけが、じつと地面にうずくまっていた。

膝を折っているのに、なお人の背丈と同じくらいのも、とても大柄な男だ。

戦場焼けした精悍せいかんな面がまえで、頬ほおにいく筋もの深い皺しわと傷痕きずあとが走り、そこをつたつて汗が流れ落ちていく。彼は目の前の真つ黒に焦げた土を眺め、微風に乗って宙を舞う灰煙の匂かいを嗅かぎながら、いつまでも立とうとしなかった。

秀長の死からもう何日も経過しているのに、まだ現実を現実として受け止めることができない。この二十年というもの、高虎はただひたすら秀長へ忠義を尽くし、一軍の先頭を駆け、各地の合戦で数多くの武功を挙げてきた。

高虎が最前線で暴れまわり、常に味方を勝利させることができたのは、主あるじである小一郎秀長が後方をがっちり固めてくれたからである。

秀長はいわゆる勇将ではない。だが大いなる将器が備わっており、合戦ししやうが輜重しちゆう（補給）に支えられているというもつとも重要な真理を、きちんと理解していた。

秀長が将である限り、兵たちが前線で飢えることはなかった。後方から潤沢な軍資金が供給され、現地での購入に充てられた。前線部隊には多くの商人たちがついてまわり、矢玉や火薬はもとより、糧食や嗜好品や生活必需品やあるいは女や、およそ戦地で必要とされるありとあらゆるものが円滑えんかつに供給された。

これらが一つでも欠けると、最前線での軍の士気は急速に低下する。規律を守らぬ兵士が増え、戦闘力が落ち、現地での非行が多くなる。そうなると民心が急激に離れ、そこを敵につけこまれてしまう。

小一郎秀長は、そうした目に見えぬ勝敗の分かれ目が見える男だった。彼は総大将でありながらあえて黒子に徹し、ただひたすらに輜重の質を上げることによって軍の士気

を向上させ、常に最大の戦闘力を維持できるように努めた。

中国攻め、四国攻め、そして九州攻め。豊臣軍団の征くところ、必ず帷幄には小一郎秀長の瘦躯があった。そして常に勝利を得た。

段々と巨大になる軍勢を動かす、複雑に利害や感情の絡み合う諸侯の仲を統御し、数万もの兵を飢えさせることなく士気と戦闘力を保つ。これがどれほどの難事であるか、いちどでも戦場に出たことのある者ならばわかる。綺羅星のごとき前線の勇将たちは、皆々等しく大和納言の指揮に服し、人としての小一郎秀長を敬愛していた。

天下一統への最後の総仕上げは、小田原北条氏を標的にした関東攻めであったが、このときはすでに秀長が床に臥しており指揮を執れなかった。とたんに輜重の質が落ち、兵士たちは最前線で飢えた。緒戦で、要衝・山中城を力攻めにより陥落させ、北条軍の指揮の混乱に乗じ、箱根山の堅固な防衛線をわずか一日で突破できたからよかつたようなものの、そのまま冬の山中で持久戦にでも引きずりこまれていたら、豊臣軍の損失は膨大なものになり、もしかしたら侵攻作戦そのものが破綻していたかもしれない。

高虎はそうした小一郎秀長の将器に畏敬の念をもち、その股肱の臣として戦い続けた。ただ戦い続けていればよかつた。あとの心配事は、すべて秀長が受け持ってくれていだから。

その秀長が死んだ。

高虎は、だから変わらねばならなかつた。だがどのように変わればいいのかかわからない。それを学ぶ前に秀長は黄泉の国へと旅立った。高虎が地面に座り込み、いつまでも立とうとしなかつたのは、主を失った衝撃以上に、自分が次に何をしたらよいかかわからなかつたからなのだ。

かたわらに、新七郎という配下がやってきた。彼は高虎の従兄弟で、同じ藤堂姓である。人目のあるときは違うが、いまは身内として高虎に優しく声をかけた。

「さ、そろそろ行こか。そこにいつまで座ってたって、小一郎さあは戻ってこん」

高虎は、うつろな眼を新七郎に向けた。そしてもう一度だけ火屋のほうを見、また虚空を彷徨っているかもしれない秀長の魂のかけらに思いを馳せ、ため息をついて立ち上がった。

天をつくほどの大男である。

同じ血の流れる新七郎も大柄だが、高虎の大きさは際立っている。丈は六尺三寸（約百九十センチ）。筋骨隆々として肩が張っている。

もうそこに四半刻（約三十分）も座り込んでいたために足が痺れ、よろけそうになった。高虎の腕をがっちりつかんで支えた新七郎は、笑いながら続けた。

「あつちの庫裡くらりで、宗陳そうちんさまが待つとられる。城に帰る前に少し話したいそうじや」
宗陳とは、この葬儀の導師を務めた蒲庵古溪ほあんこけいという名僧の通り名である。かつての越前えちぜんの名将・朝倉宗滴あさくらつとくの落とし胤だねと噂うわさされている男で、その後仏門に入り、現在は京・大徳寺の住持に収まっている。

武家の出にふさわしい硬骨漢で、直言居士ちよくんこじ。ときの権力者たちにも畏敬され、常に一置かれる存在だったが、時に言葉が過ぎて災いを招き寄せることがあった。現に彼は数年前、秀吉の怒りを買ひ、九州博多に配流はいりゅうされてしまった。京に復帰したのは昨年のことである。秀長と千利休せんりきゅうの運動によるものだった。

だがその付き合いはあくまで秀長だけのもので、武人である高虎との関係は薄い。これまで面識は数度のみ、ほんの儀礼的な挨拶を交わしたことがあるだけだ。怪訝けげんに思った高虎は、新七郎をともなつて庫裡に向かった。

待ちかまえていた寺僧が一礼し、高虎だけを中にいざなつた。新七郎は、かすかに目礼してその場で一步引いた。

庫裡の中はとても暖かく、奥には急拵きゅうしゅうえだが立派な座敷が設えてあった。おそらく、秀吉ら高位の参列者をもてなすための施設なのだろう。そこには二人の先客がいた。一

人は宗陳、そしてもう一人は小堀正次こぼりまさつぐという、秀長の重臣である。

高虎は、あるじ秀長と同年代、十七ほど歳上の正次とは親しかった。武將というよりも優れた内政官で、これまで秀長とともに大和三国の統治に力を尽くしてきた功労者だ。頭がよく、豊富な知識と高い見識を持ち、話せば常に教えられることばかりである。

いつもは朗らかな男なのだが、今回はなぜか顔色が悪く、表情が硬かった。

高虎が座敷に入つて一礼すると、示し合わせていたかのように、先ほどの寺僧が背後でそつと襖ふすまを閉めた。その足音が遠ざかるのを待ってから、宗陳は高虎にまず、なみなみと注いだ碗をすすめた。

「貴殿は多汗な性質だからな。武人らしく、身体が大きく筋が張っている。だから汗をかき、いつも喉が渇く。そうであるう？」

宗陳は言い、高虎がためらうのを見ると、笑つてこう言い添えた。

「酒ではない。ただの白湯だ」

それを聞くと高虎は安心した。さすがに、主の身体を焚いた現場で飲酒するわけにはいかない。白湯ならばよい。実際に大量の汗をかいて水分を欲していた彼は、一気にその碗を啜あおつた。

「さて。大和納言家の紛れもない重臣である貴殿に、これから大切なことを伝えねば

ならぬ。他言無用の、重大な話だ」

宗陳は言った。齡はもう六十にもなるはずだが、まだギラギラとした精気が抜けていない。聖職者というより、それこそ形ばかり出家しただけの武家の棟梁のように見える。

高虎は居住まいを正した。おそらくは、主からの遺言の伝達であろう。

宗陳は少しだけ正次と目を合わせ、それから向き直り、高虎にこう告げた。

「大和納言は、誰かに殺された。毒を盛られたのだ。薬師の見立てでは、おそらく多量の砒霜を嗅がされたものと思われる。そしてこのこと、まだこの正次どのと拙僧、そして貴殿の三人しか知らぬ」

* * *

天正五年（千五百七十七年）の秋のことだ。

神無月の朔風に背を押されながら、一団の主従が、どこまでも続く川沿いの坂道を歩き続けていた。若き高虎は、しっかりと地面を踏み固めながら、大股にずいずい進み高度を稼いでいく。また二十歳を越えたばかりの肉体はいくら歩いても疲れないうし、身体の奥は常に火がついているようで、次々と坂道を征するための力が湧いてくる。

腰には太刀を下げ、また肩に掛けた麻紐には三つ束ねた竹筒がくくりつけてあり、中からはちやぶちやぶと水の音がする。すぐに汗をかいてしまうので、常人の倍以上の水を常に身につけておくのだ。

前方には、わざと装飾を落とした地味な馬に股がる小柄な武士が一人。さらに道案内を兼ねた馬の口取りが一人。人馬一体となつてゆるゆると坂を登る。高虎は、その武士の隨身（護衛役）として後尾を固めている。

馬上の武士の名を、羽柴小一郎長秀という。長秀の長は、兄の主君、織田信長から賜った偏諱である。このころすでに三十代の半ばをすぎていた。

小一郎は、まだ敵から奪い取ったばかりの竹田城の城代だ。その麓から南に延びる、この深谷一帯を治める事実上の領主でもある。

この谷は、その全体が「銀谷」と呼び習わされている。もうすこし上流に、矩（直角）に切れ込む別の谷があり、その奥に、生野銀山として知られる一大鉱産地帯が広がっている。

小一郎の狙いは、まずこの地方一帯に莫大な富をもたらす銀山の様子を実地に見ておくことだった。またそこで産銀に当たる者ともと誼を通じ、手懐けておくことも目的である。

羽柴軍による但馬、丹波侵攻は順調に進捗しており、領内は落ち着いている。危険は少ないと思われたが、それにしても新参の領主自らが警固の兵も連れずにぶらりと歩き回れるような場所でもない。だが、容貌魁偉な大男である高虎ひとりを連れていけば充分、と小一郎は家臣たちの反対を押し切って城を飛び出てきた。

とはいえ実は、馬の口を取る男も武士である。

居相孫作という名の近在の土豪で、高虎の古くからの友だった。要害堅固な竹田城への攻撃では、地元の地理に詳しい孫作の案内は大いに役立った。

孫作はこの銀谷に縁故の者も多い。高虎と孫作がいれば、ものものしい警固の隊列など逆に邪魔になるという考えも、小一郎にはあった。

道々、小一郎は馬上から高虎に話しかけた。

「与右衛門、この銀谷こそが大切じゃぞ。この山を得たことが、今後の羽柴と織田の躍進を支えるに違いないのじゃ」

「はて……おつしやる意味がわかりかねます。拙者にとつては明々白白、この但馬国にてもっとも大切なものは、我らがつい先ほどまでおつた竹田の城に他ならぬかと」

「なぜそう思う？」

「はあ、あの雲の上に突き抜けて聳える天空の城。ここさえ押さえておけば、山深き但

馬の隅々まで見渡し、諸城の動向や、敵勢の侵攻をいち早く知り、未然に防ぐことができます。さらに我らが居城は天下の要害。少々の軍勢に攻められても、すぐに陥ちることはございませぬ。まさに、但馬の宝玉と申すべき城でございます」

「たしかにのう。だが我らはその要害を、ほんの僅かの兵力で陥としたぞ」

「それは……」

「はつはつは。自分では言いにくかるう。儂が代わりに言うてやろう。他ならぬお主と、孫作がおつたからこそ陥とせたのじゃ。儂は心より感謝しておるぞ。お主らを配下に持ててよかつた。改めて礼を言う」

小一郎は、謙虚にこう言うて馬上から頭を下げた。高虎はただ恐縮するばかりだったが、孫作は馬の口を取りながら振り返り、丁寧な腰を折った。

突然の動きに馬が驚き、ぶるりと震えた。小一郎はさらに言う。

「そうやって陥とし入れた竹田の城じゃが、実はその価値は与右衛門の申す以上のものがある。さすが武人らしく、おぬしはあくまで要害（軍事拠点）としての竹田の大切さを語つたが、儂が言うのは、城の背後に延びるこの銀谷こそが、今後、我らにとつてかけがえのない打出の小槌になるということじゃ」

「打出の小槌。はて、いかなる意味でございませうやうやう？」

「この谷の奥にある生野の銀山では、おそらくは日の本でいちばんたくさん銀が採れる。石見のほうにも有望な銀山があるかに聞か、まずはここじゃ。ここを押さえる限り、地中からどんとどんと富が湧き上がってくる。領地から得られる田租や地子以外に、我らはもうひとつ財の源を持つことになるのじゃ。儂の見立てでは、この地の銀をきちんと取り扱い、諸国に流して適正な税を得れば、おそらく羽柴の領地が倍加したのと同じになる」

「すると……拙者の頂戴する石数は」

「今の倍、二千石ということになるのう。配下も三、四十は抱えることができるぞ。おぬしがそれだけ多くの軍勢を率いると、戦場にますます血の雨が降るな」

小一郎はこう言って笑う。

「軍勢を倍にするには、まず敵味方の血を流して他国を奪い取るしかないと思うておりました。しかし、ここをきちんと押さえただけで、血を一滴も流さずにそれと同じことができるのですな」

徹頭徹尾、武辺の男である高虎は、自分とはまるで発想の仕方が違う主人の頭脳にあらためて舌を巻いた。

まっすくの谷道の脇には、さらさらと音を立てて流れてくる円山川のせせらぎが目

入るが、崖上につけられた道から降りるには遠く、また危険が伴う。道中、水を汲める場所は限られていた。孫作にあらかじめそのことを聞いてはいたが、自らが欲する水の量に対する見通しがやや甘く、高虎の三連の竹筒は途中で空になってしまった。

小一郎が苦笑いしながら、馬の腹にくくりつけた革の水袋から少し分けてくれた。とはいえ、主人の好意に甘えてばかりいるわけにもいかない。高虎は渴きを我慢し、干からびそうになった喉を気力で庄しながらなんとか残りの道程をこなした。

ようやく、川の右岸に拓けた土地が見えてきた。山仕事をしている男たちや、顔中を真っ黒にした鋤夫たちがあちこち行き来している。何人か女郎と思いき女たちもいた。簡素な船着場があり、半裸の男たちが積み上げられた俵を次々と川舟の上に積み込んでいる。舟の上には、必ず長檣でもものしく武装した警固の兵がついている。

数軒の店が出ており、山奥とは思えぬほどの賑わいがある集落だ。

川面に竹筒を浸けてぶくぶくと水を汲み、そのあいだ空いている掌でひとすくいして喉を潤した高虎は、そこで一行を待ち受けていた者どもの姿に氣づいた。

「山師の金ヶ瀬源兵衛でございます。こいつは銀吹師の為吉と申します」

二人はまず、ひときわ目立つ高虎に向かって挨拶したが、高虎はこの谷の主が誰なのかを、顔の動きではっきりと示した。そのとき小一郎は馬を下りて切株に座り込み、草

鞋を脱いでくつろいでいるところだった。着ているものが他の者より多少立派なだけで、その質朴な仕草は、そこいらの農民や杣人などとなんら変わるところがない。人違いしていた二人は、慌てて正しい方角に飛んでいった。

源兵衛と為吉の案内で、小一郎長秀主従の三人は、生野銀山の奥へ奥へと入っていく。斜面はほとんど険しくなり、小一郎もいつしか馬を下りて尻を押し、一人の用人のようになつて、口縄を取る孫作に力を貸している。

金ヶ瀬源兵衛は大変に世慣れた男で、道々、ここから掘り出された銀が、日の本中に、そして海を渡つて異国にまで行き渡るさまを、まるで自分の目で見えたかのように生き生きと語つた。銀はまず南に運ばれ、瀬戸内に面した飾磨津から各地に船で積み出される。飾磨津までは下り道だがとどこころに難所があり、また無意味な関所もあるので、但馬攻略と同時に進行している羽柴氏の播磨攻めには大いに期待していると云う。さらに銀の精錬を行う過程ではさまざま副産物が生まれ、それらも別の流れで高く売れるとも口にした。

やがて視界が開け、山中にとつぜん大きな集落が現れた。

馬とともに孫作はその場に残り、小一郎と高虎だけが中に入る。

源兵衛は、銀山のおちこちにある坑口や伏屋（精錬場）などを案内して回つた。さらに採掘に関わる男たちの、日常の生活区画の様子なども包み隠さずに見せた。ここには人が生活するのに必要な全てのものが揃つている。中には数軒の女郎屋すらあつた。

「先ほど、麓の船着場で艶めかしい女どもの姿を見かけたが、この者か」
小一郎がつぶやいた。源兵衛は笑いながら言う。

「たしかにそうですが、女はそれだけじゃありません。採鉱にも関わっております」

「女が、間歩（坑道）の中に？」

小一郎は、驚いて尋ねる。為吉が頷いて答えた。

「へい。いっぱい働いておりますよ。地下深くまで潜っていくのは男たちですが、そこから上がってきた岩のかけらを、地上に出す前にあらかじめ細かく砕いておかねばなりません。そうしておかないと、後でうまく精錬できませんからね。これは、主として女の仕事なのです。砕女と呼ばれます。さほどの重労働ではないが、日がな一日、暗い間歩の一角でただひたすら槌を振るって岩を砕くのです。こんな根気の要る仕事は、男にはとうてい無理でさあ」

「そういうものか……まあ、確かに田畑を耕すのにも女手は大切であるが」

つい十年前まで、自分も尾張おわりのしがな農夫にすぎなかつた小一郎はその言葉に納得したものの、しかし少々ソツとした様子だ。

脇で聞いていた高虎も、為吉の言うことのいちいちに驚きはしたが、しかし同時にここは天界に近い別天地であるという気がしてならなかつた。ここで行われることは常に下界の常識を越え、そこでの理は、すべて浮世離れしていて当然なのだ。

源兵衛は笑いながら、

「女郎屋であろうと、間歩の中であろうと、女どもの仕事には陽ひが当たらないという訳ですな」

などと横から口を挟む。洒落しゃれたつもりだろうが、下界の人間にはとても笑えない冗談だと高虎は思った。

「しかし、陽の当たる場所での仕事もちゃんとありますよ」

為吉が言い、源兵衛に目配せする。源兵衛は慌てて数歩あとずさりし、
「これから我らの新たな御領主様に、普段はお見せしない、とっておきのものをお見せいたします。ただし、山師たる拙者は足を踏み入れることのできぬ場所なのです。表立っては行われていないはずの作業ですから。しかしこれは、捌まき方さえ考えれば大いに儲もうかります。おそらく銀以上でございますよ。あとであらぬお疑いなどがかけられてはた

まりませぬから、御領主様にはぜひご覧いただいております。ぜひとも御内聞に。それでは、ここからは為吉のみでご案内させていただきます」

と言つて、深く腰を折つてから去つていった。

すると、為吉は用意していた数枚の真新しい手巾しゆまんを小一郎と高虎に恭うやまつしく手渡した。そして同じもので自分の口を覆い、二人に同じようにするよう身振りで示した。高虎は主人の手巾を巻こうと手を出しかけたが、小一郎は自分でさつさつつけてしまった。こういう動作は実に素早い。

「これから、多少の毒を吸います」

為吉は、手巾しゆまんごしにいきなりびつくりするようなことを言った。

「しかしながら、短い間であれば害はございません。御領主様の大切な御身おんみに差し障さまりのないよう、拙者が責任を持ち、頃合ときあひいを見定めますのでどうか御安堵ごあんぶくださいませ。それでは参りまする」

為吉が案内したのは、段々に切られた山の斜面のいちばん奥に落ち込んだ谷底だ。そこは、周囲から完全に孤立していた。

見た目は他とあまり変わらぬ一軒の伏屋があるが、その横に、見たこともない異様な

設備がくつついていた。

まるで城郭のような四角い石積みだんの壇で、中央に丸く穴が開いていた。そこから数人の女たちが出入りし、なにやら布に包んだものを捧げ持つて外に出てくる。彼女たちには表情がなかった。ただ木偶こくわくのようにぼうつとしながら歩き、そのまま伏屋の中へ姿を消す。

地面には砕かれた石や、間に塗り込んであったであろう粘土ねんどのかけらなどが散乱している。おそらく、あの丸い口を塞ふさいでいた壁を崩したものののだろうか。

その壇の上には、さらに高く突き出した別の壇が設けられている。そしてさらにその上にはもうひとつ別の壇が。高虎の目には、それはひとつの堅牢な城郭のように見えた。伏屋からはまた、異様な煙路えんろが伸びている。太く、蛇腹へびはらのように細かくうねったどこか禍々まがまがしい形をしていた。それはいったん地べたに降ろされ、何箇所かで水を張った桶おけのようなものに漬けられているように見える。先っぽからは盛大に黒い煙が上がっていた。

伏屋の壁面は高く、中で何をしているのかは全くわからない。入り口の前に、見慣れない黒銀色の岩礫がんれきが積み上げられていた。

為吉に続いて中に入る。

通常の伏屋とは全く違う空気で、そこは澱よどんでいた。壁面の上部に小さな葺戸ふきどがつき、換気はされているのだが、しかしそれでも拭ぬぐいきれない汚れや穢けがれのようなものが、部屋じゅうに充満みみしている。薄い手巾は意味をなさず、小一郎と高虎は、部屋に入るなり同時にげほげほと咳せき、込こんだ。

中では、小さく痩せた人影がいくつも蠢うごいていた。全員が女である。

そして外を歩いていた者どもと同じく、表情がなかった。高虎のような大男が入ってきてても大して反応せず、まるで精巧なからくり人形のように、ただ淡々と目先の作業を行なっている。

「挽女ひきめどもですよ」

為吉が言う。

「粉を挽く女、という意味です。先ほど積み上げてあったのは、銀鉾ぎんびらの近くで採れる毒砂どくさと呼ばれる岩です。砕女どもが砕いた毒砂をここに持ってきて、まずあちこちの伏屋で火にかけて焼いてもろくし、さらに細かく砕きます。それを、灰をいっぱい詰めた坩堝おぼろの上に並べてさらに焼くと、流れていく煙の中に、お宝が混じっているのでございます」

「いったい、なんだ？」

小一郎が問うと、為吉は勿体ぶつて答えた。

「砒霜、でございます」

「ヒソウと申したか？」

「はい。ご覧ください、あの長い煙道を。蛇腹のように醜くうねって外に続いておりますが、あいだに冷えた部分が設けてあり、そこに白い澱おりのようなものが残るのです」

「それが、砒霜なのか」

「さようでございます。ひとしきり焚き終わつたあと、煙路を外してばらばらにし、溜たまつた澱をかき落とします」

言つて、一角を指差した。

座り込んでその通りの作業をしている女たちがいた。彼女たちは取り外された木製の煙路の一部をかざし、中を金物でがりがりと搔かいて、下に置いた黒い坩堝こうごのようなものに中身を落としている。

「あややつて集めた澱を、さらに白うすなどで挽き、細かな粉にします」

為吉は部屋の別の一角のほうを向く。小さな石臼を使つて粉にしている女がいた。そして、さらにその脇で一心に真つ黒な坩堝と向かい合つている女がいる。また別のところには、大きな白い鉢はちのようなものへ播粉木すりこぎを入れ、粉をさらに細かくしている者もい

た。ときどき、やや口の尖つた鉢の中へ手を入れては、なにかを掻き出すような仕草をしている。

「あれは、さらに粉をより分けてい入るのです。その中で一番白いのが、砒霜でございます」
「砒霜なら聞いたことがある」

小一郎が、高虎に向かって言った。しかし高虎は全くの初耳だ。

「無味無臭の毒だ。それを嗅かせると、鼠ねずみが死ぬという」

「はい。その通りでございます。されど死ぬのは鼠だけではございません。量を増やせば、人も死にます」

為吉が、小一郎の言葉を引き取るように言った。

「すると、これは人を害するための毒なのか？ お主らは、この女たちに斯か様なものを作らせておるのか」

高虎は驚いて確かめる。為吉はニヤニヤと笑いながら無言で肯定した。手巾越しでもなぜか、彼が笑っているのがわかった。

高虎は、むかむかしてきた。

周囲にたゆたう毒の煙に咽むせたからでもあるが、それ以上に、戦場で正々堂々と向かい合い、名乗り合い、そして殺し合うことを生業なりわいとしている身にとって、無味無臭の毒で

ただ黙って人を害するという考え方そのものに激しい憎悪を感じたのである。

そして、そんなおぞましい作業を、女にやらせているということにも腹が立つた。為吉は、そんな高虎の感情を知ってか知らずか、小一郎に向かってさらに説明を加える。「外に構えた石炉は、ここで行っている作業をさらに大いなる規模にてなさんとする試みでございます、とはいえ、まだまだ頃合いがわからず失敗続き。やはりこうして、この女たちの手作業で細々と作るのが最も確実なやり方でございます」

「お主たちは、これを日の本各地に売り捌いておるのだな？」

小一郎が鋭い声で尋ねた。為吉は頷いた。

「はい。砒霜はとにかく法外な高値で売れます。これまでは、地位のある方からたつてのご要望があつたときだけ、ほんの少量のみを都合して差し上げていたのでございますが、なにぶんにも昨今は各地からご要望が多く。むろん、その多くは納屋（倉庫）にたかる鼠などを払う目的ではございましょうが。とにかく手前どもは、もう少しまとまった量を都合して売り捌きたいとおるのでございます。ぜひ御領主様のお許しとお力添えを賜り、銀とともに出荷して参ることができれば……おっと、これはいけない」

言つて、為吉は大袈裟な身振りでも外へ出るよう二人を促した。

「そろそろ参りましょう。万が一、御領主様の身に障りがあるといけません」

小一郎が続いて高虎が伏屋を出る間際、鉢で砒霜の粉を選り分けていた女が、ひとと大きなくしゃみをした。みるまに黄色と白の粉塵がそこらじゅうに巻き上がり、一刹那、なんにも見えなくなつてしまった。すると、あちこちで釣られたように女たちがゲホゲホと咳き込む音が聞こえ、それまで静かだつた伏屋が、瞬時にして地獄のような有様になつてしまつた。

高虎は慌てて外に逃げ出した。

周囲の空気はまだ淀み、嫌な匂いのする煙が、高虎を追いかけるように伏屋の外にまで流れ出してきていた。

「いや、いや。大変でございましたな」

手巾を剥ぎ取つた為吉は笑いながら高虎に言う。

「ですが、あの程度なら別に害はございませぬ。あなた様のその頑健なお身体であれば、なおさらでございます」

「女たちは、手巾もしていなかったではないか。あれで大丈夫なのか？」

小一郎が心配そうに聞いた。

「本当は、したほうがよいのですが。しかし伏屋の中はたいへん暑うございまして

う。すぐに息苦しくなるため、もとから誰もしておらぬのです」

「日がな一日、あんな具合に仕事をしておるのか？ 身体に障るとしか思えないが」
高虎が責めるように言う。だが為吉は悠然としたものだった。

「みな、自ら望んであそこにいるのでございます。気の毒ではありませんが、宿命でございます。家が借財まみれになり売り飛ばされてきたような者ばかりで。若ければまだ女郎として働くこともできましようが、それもできぬとあれば、地下に降りて碎女になるか、物乞いになるか、それともここに来るかでございます」

「儂は、女たちの身体に障ると申したのじゃ」

高虎は念を押す。頭のずっと上から降つてくるその声に、為吉は少々むっとしたようだ。「たしかに、ずっとあそこにいれば寿命はそう長くはないでしょう。しかし、長生きしたところで、そのあと決して報われることなどない境遇の女たちなのです。この山について、あそこでただ毒砂を砕いておれば、普通よりもいい給分が出、多少なりとも借財を弁済しつつ、なお人並みに飯を食うことができます。そしていつか年季が明け、家に帰るといふ希望を持つことも」

「実際に、帰れるのか？」

小一郎が心配そうに聞く。為吉は笑った。

「ちと無理でございましょうな。それぞれ数十年は働き続けないと返せないくらいの借財を背負っているのです。大抵はその前に死んでしまいますよ。ここから出ることもど到底できることはありません。ただ、そういういわくつきの女たちでないとの仕事は任せられないのです、もう他に逃げ場はないくらいに切羽詰まっている者たちでない」と

悪びれもせずと言う。高虎は唾をべつと吐いた。先ほどの煙で黄色く汚れきっていた。そしてそれが地面に黒い染みとなつて吸い込まれていく横に、ひとつ毒砂のかけらが転がっているのを見つけた。

思わず手を伸ばした。

「素手で触るのはやめたほうがよろこびます。あとでしっかり洗わないと、きつとかぶれてしまいますよ」

為吉が止めたが、構わず拾い上げた。そのまま掌で転がし、じつくりと眺める。

柱状の四角い粒々がいくつも不規則に集まったような、奇妙な形をしている。高虎はそれが鉱物ではなく、何かの建造物の一部に思えてならなかった。

掌には、ずしりとした重さを感じる。色は黒のようでも銀のようでもあり、そしてそのところどころに白い光沢が走る。

こんなものが、静かに人を殺す。それを盛られた人間を殺す。そしてそれを作る人間をも殺す。静かに、皆を殺す。

なんと、おぞましい塊かたまりなのか。

それは地中深くの闇の中から掘り出されたただの鉱物なのではない。きつと、地獄の底から拾い上げられてきた、魔城のかげらであるのに違いない。

* * *

「これ、与右衛門。聞いておったか？」

しばし回想に浸っていると、小堀正次の低い声が飛んだ。

高虎は、ハッと我に返った。

「これは、誠に失礼をいたしました。砒霜と言われ、思い当たることがあったものですから」

「ほう？ どのようなことだ」

宗陳が、思わず身を乗り出して聞く。

「いえ、大したことではございませぬ。竹田の城を陥としてまもなく、お館様やぐらさま（秀長）と生野の銀山に参ったことがあり、その折に砒霜のもととなる毒砂をこの手に取ったことがあるのでございます」

「たしか猛毒のはずじゃぞ。大丈夫なのか？」

「少し触れるくらいであれば。地元の者には、すぐ洗わないと手がかぶれると言われましたが、そのあとどうしたかまでは忘れてしまいました」

「竹田を陥とした頃というと、今から十数年前のことだな」

「いかにも」

「であれば、さすがに今回の件と関わりはあるまい」

「拙者、いまだお館様が身罷みまがられたとは信じることができませぬ。しかも毒を盛られたと。いったい、いかなる事の次第だったのでしょうか」

「それについては、某それががその場にいた」

正次が言い、手早く説明を始める。

「御殿でのことだ。真夜中、奥方様の絹を裂くような叫び声を聞き、あわててそのほうへと駆けつけた。どしんという大きな音と振動が伝わってきて、ついで、何かが続けざまに落ちて割れるような音も聞こえた。臥所ふしどの襖を開けて中に入ると、布団の上でお館

様が青い顔でぐったりとされておる。奥方様は、背後の戸棚の前で倒れて気を失っておられた。お館様を抱え、揺り動かしてみたがお答えにならぬ。激しく吐瀉としゃされ、あちこち汚れており、中に血も混じっていた。すぐに薬師を呼び、診みさせたが、すでに息はないとのことであつた」

「お館様は、このところずっと伏せておられました。とはいへ、意識ははっきりとされており、普通にお話しすることもでき、たまにご自身で歩き回られるようなことも。それが、いきなり」

高虎は呟つぶやいた。

「付近に曲者くせものが潜んでいる気配はなかつた。やがて奥方も我に返られたが、怪しい者は見ていないと仰おこつた。お身体はどこにも傷痕などはないため、病の症状がいきなり激しく表れたのかと考えたが、あとから薬師がそつと儂の袖を引き、これは病ではなく毒気の類たぐいだと耳打ちした」

正次は言つて、うつむく。宗陳が付け加えた。

「その薬師は大和国一番の名医だ。診たてに間違いはなからう。正次に呼ばれて拙僧も慌あわてて登城したが、確かに尋常な有様ではなかつた。元より患まかつておられた病の相ではない。明らかに何か別のものを盛られ、それが激越きまな効きをもたらしただのだ」

「禅師のお見立ても同じなのですか」

「多少の心得はある。なにぶんにも吐瀉としゃの具合がひどい。考え得るのは砒霜びじょうの毒だけだ。烏頭うとう（トリカブト）の毒では、こうはならない」

「なるほど。して、手を下した者にお心当たりは？」

高虎は、いちばん知りたいことを尋ねた。が、宗陳は首を横に振る。「あるといへばある。が、それは誰かと聞かれても、答えようがない」

禅問答のようなことを言った。困惑する高虎の表情を見て、正次が言い添える。

「砒霜毒の効き方は、盛り方や分量などによつて様々なのだそうだ。すぐに相あが現れることもあれば、ある程度、時を置いて出てくることもある。つまり、いつ盛られたのかがわからないのだ。お館様は気さくで、身分にとらわれないお方だ。お具合のよいときはこの城内を気ままに歩かれ、誰とでも気軽に話をし、一緒に茶など喫ますることもある。おそらく、下手人との疑いをかけ得る者は、この儂を含め数百人はいるだろう」

「むむ。すると誰なのか、まったくわからないということなのですか」

高虎は、うなづいた。

「そのとおりだ。無念だが、おそらく下手人が誰なのかを追うことは、ただ時間の無駄になるだけだ」

「この守りの堅固な城に、城外から曲者が忍び込むのは困難なことでございます。が、そのぶん内側の警戒はうんと緩かったわけですね」

「さらに、毒の出所もわからない」

宗陳は続ける。

「かくのごとく激しい症候を引き起こすには、夥しい量の砒霜を盛らなければならぬはずだが、そうした売買の形跡が、何も残っておらぬ」

「売買ですと！ 禪師はそのような俗世の商いのことまでご存知なのですか」

「あさましきことだが、仏の世もまた俗世よ。大寺におるとな、そうした密やかな商いにまつわる噂が、実はあちこちから聞こえて参るものなのじゃ。かつては、市の立つところには必ず寺社が絡んでおったからのう。だが今回はなんの噂にもなってはおらぬ。またその砒霜がどこからもたらされたのかも不明だ。生野からとはとても思えぬ」

「なぜそうとおわかりになるのです？」

「現在では、生野銀山からの物資の流出は厳格に見張られておる。すべてを一旦、豊臣が引き取り、一括して買い上げてからそれを売り捌くのだ。そこでの取引、物の出し入れについては全てが帳簿に記されるため、調べればすぐにわかる。昨日から人を派して確認させておるが、特に異常なところはないようだ」

「それでは、他の所からでは？ 雲州石見などは」

「あり得ることはあるな。近年、石見は生野以上に銀を産する。が、実は石見ではなぜか砒霜は採れないのだそう。おそらく地中に走る鉱脈の違いなのだろう」

「遠い他国の事情を、実によくご存知で……」

「国をまたいだ寺院同士のやり取りは、武家の思う以上に多いからのう。ただ生野にも石見にも、隣接してさまざまな鉱山がある。そのいちいちを把握しておるわけではないから、いづれ新たなことがわかるかも知れぬ」

話を聞いていて、高虎はひどい喉の渴きを覚えた。先に飲み干したはずの碗の底に、ほんのわずか白湯が残っているのを見て、ごくりと飲み込んだ。

またじつとりと、汗が出てきた。

それから半刻(約一時間)ばかり、三人は考え得るあらゆる可能性を論じ合った。

まず、豊臣政権の要人である秀長を標的にした外部の敵対勢力による暗殺だ。

しかし外部勢力といっても、前年の夏に小田原征伐が完了し東国を平らげたことで、全国の主だった戦国大名家はそのことごとくが滅ぶか、豊臣政権に膝を屈してしまっている。ごくわずかと奥州に反抗する一揆勢力はまだ残存しているが、あまりにも勢力が微

弱でまた遠すぎ、今回の暗殺を実行するだけの力があるとは思えない。

西国にも島津や長宗我部といった、最近討伐の対象となった潜在的な敵性勢力はある。しかも、どちらも他ならぬ秀長の率いる大軍に粉砕され、降伏した経緯がある。

それぞれ一国ずつを安堵され、現在表面的には屈従している彼らが、遺恨を晴らすために刺客を放った可能性は、わずかではあるが、ある。

しかし仮にそれが失敗し、あるいは露見したら、次こそ待っているのは徹底的な殲滅と族滅である。これも、現実的には極めて薄い筋だろう。

いっぽう、日本国以外の敵対勢力については、大いにあり得ると思われる。

まずは、南蛮人ならびにバレンたちについてだ。

四年前の天正十五年、突如布告された秀吉のバレン追放令により、多くの宣教師たちが日本を去り、新規の布教と現在以上の信者の獲得は極めて困難になってしまった。

とはいえ、それは多分に表向きのことである。実際はまだ数多くの宣教師が国内に居残つてこの極東への教線を必死に維持していたし、硝石や生糸、鉄砲など、南蛮からの輸入品をまだまだ必要としていた他ならぬ豊臣政権の意向により、法令の執行の度合いはごくごく緩いものだった。

しかしながら、強大化するとともに傲慢になり、次の動きがますます予測しにくくな

っている豊臣政権の今後には、南蛮人どもが深刻な懸念を覚えているのは当然のことだろう。かつて織田政権の時代から続いていた切支丹勢力との友好関係は、とうに終わりを告げている。そんな彼らが豊臣政権を敵視し、あらゆる手立てを講じて打倒しようとしても、決して不自然なことではなからう。

また、秀吉が考えているという「唐人」についてだ。

おそらくその最初の標的となるであろう李氏朝鮮と、後ろ盾となっている大明帝国による関与もあり得ることだと思われた。来るべき災厄に備え、要人を暗殺し、敵を弱めておく予防策だ。両国との人の行き来は、西国を中心に南蛮とは比較にならぬほど多い。顔貌も日本人と似ており、中によからぬ刺客を紛れ込ませることはかなり容易だろう。

だが、それら外国勢力のどこであろうと、なぜ暗殺の標的が秀長なのか不明だった。むしろ政権内の穏健派として広く知られた秀長は、さまざまな調停の窓口でもある。

外国諸勢力としては、消すよりもせむとも伝手を残しておきたい相手ではないか。

つまり、国外からの刺客も、現実的な線としては薄いと言いがたい。

ここで、大和国や紀伊国の統治にあたり、大和大納言家の実務をほぼ取り仕切つてき

た家老格の小堀正次が、もっともありそうな可能性を指摘した。

「禪師の前では、誠に申し上げにくきことながら」
と、この実直な政策実行者は、宗陳のほうを見ながら言う。

「このあたりは、名高き難治の地でございませう。古より数多くの莊園や寺社が割拠し、山がちで他から攻められにくい地形と相俟つて、数百年にわたり外からの干渉を拒否してきました。大和には興福寺とその宗徒たち、春日社、その他にも個々に抗う多くの土着の国人衆が。紀伊には雑賀衆や根来寺、粉河寺などの門徒衆が。それぞれ幾千幾万の刀槍や弓鉄砲で武装し、独立して中央の威令に反抗し続けて参つたのでございませう」

宗陳は顔色を変えずにうむと頷く。正次は、それを見るとやや安心したような表情で続けた。

「それを、圧倒的な武力でついに織田と豊臣が平らげ、大納言様が統治に当たられました。その後の労苦については、いまさう申すまでもないこと」

正次は、今度は高虎の顔を見て言う。そうだ。秀長の指揮のもと、これら難治の地を必死に押さえてきたのは、まさに高虎に他ならないのだ。

「結果として数年で国は治まり、現在は大きな乱れもなく、あれだけ抗っていた者どもも大納言様の威令に服しております」

「単に服しているだけでなく、皆々、大和納言の公平で慈愛に満ちた統治を心から敬慕しておると申すべきであろう。そうでなければ、葬儀の際にあれだけの人出があったことの説明がつかぬ」

「まさに禪師の仰る通り。しかしながら、ごく一部にはその統治がうまく行くのを喜ばぬ者がいたのも確か」

「強欲な寺社の座主や別当、あるいは宮司どもだな」

他ならぬ大寺の住持でもある古溪宗陳が、ずばりと言う。高虎も口を添えた。

「彼奴らは豊臣に従つてはおりますが、それはあくまで表向きのこと。心のうちでは、自らがいわば国主として気候に振る舞うことのできた昔が忘れられないのですな」

正次は頷いた。

「そしておそらく、実際に入部（収入）もかなり減っていたはずですよ。苛斂誅求から逃れた民は大いに喜びましたが、寺社は違っていたでしょう。それまで数百年も持ち続け、自分たちのものだと思っていた特権を、わずか数年で大幅に削られてしまったわけですから」

「彼らにとつては改悪に当たる法を決め、その仕置のすべてを行なったのが大和納言だったというわけだ」

宗陳が、深いため息をついて言った。
もちろん、それが一番ありそうなことではある。

頭で納得はしたが、どこか腑に落ちなかった。なので高虎は、ただ感じたままを言った。
「はたして、そうでありましようか？」

宗陳と正次が、ちよつと驚いたように顔を上げた。

「長らくこの地に蟠踞していた権門巨刹にとって、大納言様の治世、確かに直接の実入りは大いに減つたでありましょう。が、そのぶん、国じゅうの商いが活発になり、あちこちに市が立ち、関わる誰もが少しずつ豊かになりました。荷や金が国じゅうに巡るようになれば、それはおそらく、回り回って、そうした寺社をもあちこちで潤していたに違いありません」

二人は驚き、互いに顔を見合わせた。どうしても高虎を、計数の苦手な武刃者と思いつい込む癖がついているのである。高虎は言葉が続ける。

「それまで少数の者が独占していた特権を廃し、広く解き放つことで、国全体がより大きな利を得るようにしたのです。数百年続いていたやり方を、大納言様はわずか十年で変えてしまわれました。途中、小さな一揆などあれ、大きな混乱もなく受け入れられたのは、必ずや違った形で権門巨刹にもなんらかの利があつたからに違いないと拙者は考

えております」

「するとお主は、彼奴らが大納言様を害したわけではないと……」

正次が確かめる。

「あくまで、拙者の当て推量でございます。あるいは小堀様の言われる通りなのかもしれませんねが」

「なるほどのう。与右衛門の申すことにも一理ある。たしかに、ああいった巨大な権門は、なによりも自らの生き残りに熱心じゃ。仮に大納言を弑逆したとて、もし関与が露見した場合、関白殿からの報復を招くは必定じゃ。今度は山を焼かれるどころでは済まない。おそらく行き着く先は、根こそぎの破却と根切り（皆殺し）、そして宗門の消滅じゃ。長らく権威に胡座をかき、ただ口を開け甘い果実だけを喰らい続けてきた彼奴らが、いまさらそのような大それた賭博を打つとは考えにくいのう」

宗陳が言う。みずからが京の大寺の住持だけあり、その言葉には実感がこもっていた。それを聞いて正次も、納得したように素直に頷く。

「たしかに物や銭が回れば、寺社にとつても後からいろいろな利得がある。おそらく、その嵩は年々増していたはずだ。それがいざれ失つた特権を埋め合わせるに足ると思えば、おのずと不満も収まろう。いや、さすがの見立てだ、与右衛門殿。長年、直に大和

大納言様の薫陶を受け続けただけのことはある。かつての荒ぶる猪武者がさまざまに異能を発揮して驚いておったところへ、ついに政においても一流になったな。大納言様ご存命なら、おそらく涙を流して喜ばれたことであろう」

「身に余るお言葉でございます」

「で、お主の考えはどうなのだ？」

宗陳が尋ねると、高虎は答えた。

「わかりませぬが、もしかしたら、これは豊臣の内に発した策謀ではないでしょうか？」

「豊臣の内？」

「はい。拙者の見るところ、御一統により国内にほぼ敵がいなくなったことで、まこと恐れ多きことながら、関白様は何方へ向かうべきか、御心を迷わせておられるように思っています。関白様をお支えすべき諸将も、次になすべきことがわからぬまま、石田（三成）や浅野（長政）ら奉行衆らの動きにただ戦々兢兢々として様子を窺う日々。誰も彼もが疑心暗鬼に陥り、内心で互いに牽制しあっております。戦がなくなり、あれほど待ち望んだ泰平が到来したはずなのに、豊臣の内では、誰一人として心を安んじておられないのです」

「うむ。たしかにそうだ」

「そんな折、天下のいわば重石として行動の範を示し、民心を安堵させ、諸将の争いを抑えることのできるのは、ただ大和納言お一人のみでございました。その大納言様の存在を疎ましく思い、邪魔に感じた者が、ふたたび天下を乱に陥らせるべく策謀を巡らしたのではないかと」

「するとお主は、その不埒者は我らのすぐ近くにいると申したいのだな？」

「はい。いかにも。ただそれが誰なのかについては、現時点では全く思いつきませぬ」

正次が、心配そうに宗陳に言う。

「時に、このこと、関白殿下（秀吉）に早くお伝えせねば」

しかし、宗陳ははげしくかぶりを振った。

「いや、まだ時期尚早じゃ。ただできえ皆が動揺しているこの時に、新たに不安を煽るような、しかも中途半端な報を上げてはならぬ。それはさらなる疑心暗鬼を産み、下手をすると天下大乱の基ともなりかねぬ。関白殿下はじめ諸人が、今はとりあえず大納言様が前々からの病で亡くなったと思ひ込んでおるはずじゃ。我らにはまだ多少の猶予がある」

「猶予、とは？ 何をするための猶予なのでございますか？」

高虎が汗を流しながら聞く。宗陳は断固として答えた。

「この暗逆あんぎやくを企てし輩とその仔細しさいとを、我らの手で調べ、残らず白日はくじつの下に晒さらすことじや。そうせねば、いずれ我らに大きな災厄が襲襲つてくるであらう」

高虎と正次は、ぎよつとした。

「それは、いかなることか？」

ほぼ同時に尋ねた。沈鬱ちんうつな顔で宗陳は答える。

「実はこのう。これはおそらく拙僧と、あと数名しか気づいてはおらぬはずの話なのだが、お主らには話しておこう。実は与右衛門の申した通り、昨今、豊臣の政権内部に大きな異変の兆きざしがある」

「もしや、我が大納言家を廢絶せんとする動きでございませうか？」

高虎が大きく身を乗り出して聞く。が、宗陳はすぐに頭を振った。

「いや、そこまでまだ明白な形を取ってはおらぬ。が、政権内部の力関係が大きく変わりつつあるのは確かだ。これまで豊臣の天下を支えてきた我らに挑み、取って代わろうとする動きがある」

「具体的にお教えください。それは何奴なのですか！」

「まだ、誰なのかまではわからない。しかし現に大納言はこうして消されてしまった。

そしてこのところ、大納言様とともに関白の身近に仕える宗易そうえいき（千利休）の身にもまた、

何か異変の起こる兆きざしがあるのだ」

「兆きざし、とは？ いずれ宗匠そうしやうも毒を盛られるとの謂いでございませうか？」

高虎の脳裏に、あの沈着冷静な男の姿が浮かぶ。

自分に負けず劣おとらずの大男だが、常に静かに端座たんざして、面おもてには何も感情を浮かべない。必要などきは、まるで壁の一部になってしまったかのように自らの存在を消すことができる。が、出るときにはすつと前が出る。そして秀吉にも臆おくせず直言する。

行動が時宜ときぎを得ているので、たとえその言葉が意に染まぬものであろうと、権力者からの怒りを買うことがない。ただ直言するばかりの剛直な宗陳とはそこが違う。高虎には、利休がその場の空気をすべて掌握し、自在に操っているようにすら思えた。眩まぶしい存在だった。

高虎は、この場にいる全員と同じく、茶の道においては利休の弟子でもある。

「拙僧と宗易が昵懇じつこんの仲であることは、今さら申すまでもない」

宗陳は言つて、高虎と正次を交互に見比べた。

「大納言様に頂戴した御恩に等しいものを、拙僧は宗易からも貰うておる。先年、つい関白に言い過ぎて九州に流されたとき、密かに色々な人を動かし、中央に復帰できるようまず真つ先に運動してくれたのは宗易だ。また大徳寺を再建する際に膨大な奇進をし

てくれたのも宗易だ」

高虎は正次とともに頷く。そんなことは、もちろん皆知っている。「ゆえに、大徳寺としては金毛閣（山門）の楼上に、宗易の木像を安置することでその好意に対する返礼とした。ところが、これが関白の逆鱗に触れた」

「多額の寄進をした大旦那の像を作って安置する。どこの寺院でも当たり前前にはやられていることだと思います。それにいったいなんの問題か？」

正次が不思議そうに聞く。

「山門の下を、関白を含めたさまざまな貴顕もお通りになる。すなわち、通る者みな宗易の足に踏みつけられることになる。これは不敬であるというのだ」

「なんと！ ただの言いがかりでございましょう」

驚いて高虎が叫ぶ。宗陳も頷いた。

「ところがだ。実際にそう言い立てるお咎めの使者が飛んできた。関白自らの命でな。

大納言逝去の、ほんの数日前のことだ」

「数日前ですと。ほぼ同時でございませぬ」

「宗易は、ために葬儀にも来られず、今も聚楽第の屋敷の中で謹慎しておる。こんなことは、これまでただの一度もなかったことだ」

「偶然とは思えませぬ。いったい、背後で誰が糸を引いておるのか……」

正次が唸ると、宗陳は覚悟を決めたように言った。

「それが誰なのかはわからぬ。しかし我らのまわりで、何か目に見えぬ大きな動きが始まっていることだけは確かだ。宗易と拙僧はすでにその標的になっておる。そして、次に狙われるのは、おそらくこの大和納言家そのものに違いない。だから我らは一刻も早く背景を探り、下手人とその黒幕を暴かねばならぬ。そうしなければ……」

「そうしなければ？」

高虎と正次が同時に声を上げた。宗陳は、ゆつくりと答えた。

「おそらく、大和納言家はいずれ取り潰されることになる」